

Harṣa 三戯曲における arthālaṃkāra について

入 山 淳 子

7世紀前半に北印度を支配した Harṣavardhana は、*Priyadarśikā*, *Ratnāvali*, *Nāgānanda* (=PD, RĀ, NĀ) の三戯曲¹⁾ の作者とも言われる。先回²⁾ 王としての Harṣa の事績を迎える中に、宗教的背景から、文人としての Harṣa の作といわれる三戯曲の制作時期に触れた。そこで今回は Harṣa 研究の一環として三作品そのものの検討を試みる。

手段として、作者の技巧の癖や傾向を具体的に知ることのできる alaṃkāra を取り上げる。Harṣa という一人の作者に帰せられる複数作品の、詩節の表現効果を丹念に検討する。そのうち、本稿では各作品の技法の詳細な解説は省き、alaṃkāra の種類と頻度のみを取り上げ表にして考察する。

しばしば詩作品の注釈には、作品の書かれた時代より後代の詩論書に拠って技法を検討する方法がとられる。しかし今回の試みでは、作品とほぼ同時代の詩論書を中心におく。なぜなら、詩人が常に詩論書に親しみつつ詩作したのであろうと想像される一方で、詩論にもまた、その詩論書の書かれた時代に到るまでの文学的歴史と、その時代の文学的状況が反映されていると考えるからである。

今回は主として、Harṣa の年代に近いとされる Daṇḍin の詩論書 *Kāvyaḍarśa*³⁾ (=KĀ) に基づく。但し三作品中の詩節には、KĀ に完全に一致する技法が見出だされない場合がある。Daṇḍin もまた alaṃkāra の種類や、さらに下位区分した亜種の名称や例文の網羅的でないことを随時こわっている。そこで詩論書中に相当する alaṃkāra の名称を知るととどめず、詩節の表現効果を迎える目的を果たす意から、必要に応じて後代の詩論書も参照する。詩作に当たり平凡な表現に終わらせず、読む者に詩的驚きを与えるために技法を凝らして言い表わすのが alaṃkāra で、音韻による “śabdālaṃkāra” と、意味による “arthālaṃkāra” に二大別される。今回は特に両者のうち、Daṇḍin が KĀ の全詩節の5割以上を費やして、その分類と例文にあてている arthālaṃkāra を対象とする。

Daṇḍin はかなりの数の arthālaṃkāra の種類と亜種を定義し、それを具体化するために自作の具体的例文を施す。この分類の体系的でない点がよく欠陥とし

(50) Harṣa 三戯曲における arthālaṃkāra について (入 山)

て指摘される。しかし今回の実際の詩節の検討にあたっては、むしろこの分類の豊富さと例文の呈示に目を向ける。なぜならこの二点は、技法を知る上で重要な、具体的な語の用いられ方の微妙な差異を映し出しているからである。

三作品の arthālaṃkāra の種類と頻度を一幕ごとに表で示す。⁴⁾

戯曲 arthālaṃkāra	PD					RĀ					NĀ				
	1	2	3	4	/計	1	2	3	4	/計	1	2	3	4	5 /計
類似 upamā	4	10	8	1	/23	8	3	9	4	/24	6	7	3	10	11 /37
rūpaka	4				/4	1	2	4	2	/9	4	1	2		/7
arthāntaranyāsa			1	1	/2			2		/2					
vyatireka						1				/1	1		1	3	/5
samāsokti		2	2	1	/5	2	1	2		/5			3		/3
utprekṣā	2	5			/7	10	5	3	6	/24	2	3	2	6	5 /18
apahnūti				1	/1										
原因 vibhāvanā								1		/1	1			1	/2
hetu	1	1	1	2	/5	10	3	7		/20	5	5	3	2	8 /23
誇張 atīśayokti						2	1		1	/4	1		3	2	3 /9
udātta	1				/1	1			1	/2	1		1	2	/4
矛盾 virodha								2		/2	1			1	/2
(viṣama)			1		/1						1		1	2	/4
他 svabhāvokti	2	2		2	/6	2	3	1		/6	5		3	2	5 /15
dīpaka						1		1		/2	1		1	1	1 /4
paryāyokta								1	1	/2					
śleṣa			1		/1	4	1			/5			1	1	1 /3
āśiḥ	2			1	/3	3			1	/4	3			2	/5
(parikara)											1	1		2	1 /5
(samuccaya)	2		1	3	/6	1		1	1	/3	2		1	3	/6
(smaraṇa)						1				/1					
対象詩節数	11	9	12	6	/38	22	13	16	11	/62	18	10	13	18	27 /86
全詩節数	12	10	15	12	/49	25	21	19	22	/87	20	14	18	28	41 /121

以下に主な点をまとめる。

1. 三作品相互比較：〈種類〉PD, RĀ, NĀ にみられる各々 13, 18, 17 種のうち10種が三作品に共通する。さらに PD の 13種中11種が RĀ と NĀ にそれぞれ共通する。このように多くの arthālaṃkāra の種類が三作品に共有される。

PD にはみられない $R\bar{A}$ の残り7種, $N\bar{A}$ の残り6種のうち, 5種が $R\bar{A}$ と $N\bar{A}$ に共通である。つまり, $R\bar{A}$ と $N\bar{A}$ には, ほぼ同数の17, 18種が用いられ, そのうち15種が共通している。他にも $R\bar{A}$ と $N\bar{A}$ に限っては, 後代の詩論書に取り上げられる anuṅga に相当する表現もみられ, 共通点が多い。

一方で, 他の二つの作品に0~1回みられる程度であっても, $N\bar{A}$ だけには4~5回みられるものが3種あり, 種類の点で $N\bar{A}$ には独自の一面が加わっている。

〈頻度〉 $N\bar{A}$ と RA は, hetu と utprekṣā の頻度が upamā に次いで際立って高いという共通の特徴をもつが, PD は目立つ特徴をもたない。

2. 三作品と $K\bar{A}$: 〈種類〉 $K\bar{A}$ の示す28種のうち17種と, 後代の詩論書に挙げられる4種(表中に()で示した)が三作品にみられた。

〈亜種〉 $K\bar{A}$ は多くの亜種を一樣に並べるが, 三作品にあらわれる亜種は特定の, しかも特異な性質のものより, 比較的単純な性質のものに集中していた。例えば upamā, rūpaka, vyatireka, atīṣayokti である。

以上は三作品という限られた材料を検討したものであり, これのみをもって同時代あるいは kāvya 一般における三作品の位置を語るのには早急である。ただ三作品における arthālaṃkāra は, 特徴とは言えない程度ではあるが, upamā をはじめとする比較的単純な技法を主に, 他の種々の技法を適度に混じえる程度であった点には目を向けるのが妥当であろう。三作品にはいずれも, 過度に走らず, 平易な技法を用いる作者を想定できる。

1) 底本 PD: ed. and tr. by G.K. Nariman, A.V.W. Jackson, C.J. Ogden, New York, 1965. $R\bar{A}$: ed. et tr. par M. Lehot, Paris, 1933. $N\bar{A}$: ed. and comm. by T. Ganapathi Sāstri, Trivandrum, 1917.

2) cf. 入山「Harṣa の無遮大会」『印仏研』41-2 (1993, 3), p. 1103-1101(60-62).

3) $K\bar{A}$: ed. & comm. by K.R. Potdar, Poona, 1970(2nd.).

4) upamā と rūpaka のどちらにも理解できる RA3. 61 は両項目に重複して数え上げた。atīṣayokti は $R\bar{A}$ の3, $N\bar{A}$ の6が類似に基づく性質のものである。śleṣa は, 別の arthālaṃkāra に付随して観察される場合は śleṣa の項に加えなかった。例えば śleṣopamā は upamā に含めた。

〈キーワード〉Harṣavardhana, arthālaṃkāra, Kāvyaśāstra

(東京大学大学院)